かめのりコミュニティ
THE KAMENORI COMMUNITY

公益財団法人 かめのり財団は
日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて
未来にわたって各国との友好関係と
相互理解を促進するとともに その架け橋となる
グローバル・リーダーの育成を目的に
事業を行っています

今号の内容

設立15周年記念かめのりフォーラム 2022
第16回かめのり賞表彰式
奨学生夏の研修交流会
設立15周年記念事業
かめのりカレッジ 2022 サマー
設立15周年記念事業
かめのり未来をつくるリーダーシッププロジェクト

No. 41
DEC. 2022

公益財団法人 かめのり財団 The Kamenori Foundation

設立15周年記念 かめのりフォーラム 2022

ご挨拶　理事長　木村 晋介

ロシアがウクライナに侵攻し、8ヵ月余りがたちます。21世紀にまさかこんなあからさまな侵略行為があろうとは思いませんでした。戦争は、人々を敵と味方に引き裂きます。そして、敵でも味方でもない人々の心も引き裂きます。これを乗り越えるために特別なものがあるわけではありません。多文化共生に向けた人材づくりという私たちの営みを、より丁寧に実践していくほかはないと思っています。

今年度、かめのり財団では15周年記念事業として、大学生を対象としたハイブリッドによる人材育成プログラムや、日本ユネスコ協会連盟と共催したオンライン事業、国際交流基金との協働による日本語教育支援事業を行いました。そして今日、私どもと同じ志をもって事業を展開しておられる3団体を顕彰し、「かめのり賞」を差し上げるところです。

戦争を終わらせ、新たな戦争を作らない。国境を乗り越える人材の育成が、今ほど求められる時はありません。皆様にさらなるご協力をお願い申し上げます。

詳細は中ページにてご紹介します。

設立15周年記念 かめのりフォーラム2022

第16回かめのり賞表彰式

かめのり賞は、日本とアジア・オセアニアの若い世代を中心とした相互理解・相互交流の促進や人材育成に草の根で貢献し、今後の活動が期待される個人または団体を顕彰するものです。今年度は20 団体・個人よりご応募いただき、外部有識者を含めた「かめのり賞選考委員会」により、3団体の表彰が決定しました。

かめのり大賞 草の根部門　Minami こども教室

大阪市中央区で外国にルーツをもつこどもたちの学習支援を行う。2012年の外国人母子心中未遂事件を契機に、外国にルーツをもつ家族を孤立させてはならないという思いで設立され、現在10年目を迎える。当初は小学生を対象としていたが、こどもの成長と共に中学生や高校生の進路支援にもサポートが拡大。現在、登録するこどもの数は150名以上に。遠足などの企画を行うほか、地域の複数のこども食堂と協力し、居場所としての機能も果たしている。2020年度からは行政から委託・助成を受け保護者相談事業を開始した。

かめのり大賞 人材育成部門　特定非営利活動法人 日本ミャンマー豊友会

14年前『ミャンマーと日本の子供たちの未来の為に』を活動理念に掲げ、豊かで平和な世界の実現を目指し設立。インパール作戦の敗退時の御恩に報いたい想いで、無認可保育園等を作り続け、孤児院等の支援を続けている。今期は、パオ族の青年たちの永年の願望であった職業訓練所の完成を見ることができ、第一弾の寄付講座として日本語教室をZoomで3クラスを開催。来期の新事業として、具体的な技術取得と将来のミャンマーの各分野でリーダーシップを担えるような人材が日本に勉強に来られるよう、ルートの確立を目指す。

かめのりさきがけ賞　特定非営利活動法人 北関東医療相談会

生活困窮している人々の検診、検診結果の説明、要治療者のフォローを実施しているボランティア団体。1997年群馬県にて『外国人の為の医療相談会』として発足以来、人道的支援の立場で、活動による支援や経済的支援を行う。近年、日本国籍者にも同様の支援が必要と分かり、国籍を問わない支援活動に切り替え。2013年NPO法人化。すべての人が健康と平和な生活ができる共生社会の実現をめざし、現在は、医療支援としては医療費の支援、病院同行支援、また社会的生活支援として家賃、水道光熱費、食糧支援、教育支援を実践中。

設立15周年記念 かめのりフォーラム2022

**2022年11月10日(木)、「設立15周年記念かめのりフォーラム2022」をアルカディア市ヶ谷で実施しました。
対面では約3年ぶりの開催となった今回のフォーラムでは、原丈人氏による特別講演、かめのり賞の表彰式と受賞団体の活動紹介、そして財団の今後の展望を共有し、充実した会となりました。**

「設立15周年記念かめのりフォーラム2022」は弊財団理事長 木村晋介の挨拶で始まりました。木村は皆様のご支援に感謝申し上げ、2006年の財団発足からこれまでに奨学支援をした大学院生、大学生、中高生、教育関係者が約2,150人にのぼることを紹介。ロシアによるウクライナ侵攻に触れ、国境を乗り越える人材の育成が今こそ求められていると力強く語りました。

続いてご来賓の独立行政法人国際交流基金 梅本和義理事長よりご祝辞をいただきました。理事長の梅本氏は、国際交流基金と弊財団が2013年から共催する「にほんご人フォーラム」の軌跡をお話くださいました。また50周年を迎えた国際交流基金の経験から「若い世代に対する長年の支援は、人材のネットワークを生み、貴重な資産となる。成果はすぐには見えないかもしれないが、継続の意義は大きいと確信している」と弊財団にエールをいただきました。

フォーラムは特別講演へと進みます。アライアンス・フォーラム財団会長、DEFTA Partnersグループ会長の原丈人氏をお迎えし、「狂人日記と公益資本主義」と題してご講演をいただきました。原氏は「公益資本主義」の重要性や日本と世界の課題を明快にお話くださいました。ご自身の歩み、そして留学生へのメッセージを交えたご講演は、会場全員の心に深く刻まれたのではないでしょうか。

今回の特別講演が実現したのは、原氏と弊財団創設者・評議員 康本健守の香港での交流がきっかけでした。康本の挨拶ではそのエピソードとともに、原氏と原氏のお父様が設立した「原鉄道模型博物館」を紹介。ぜひ足を運んでほしいと話しました。その後、理事・事務局長の西田浩子より、かめのり財団の歩みを紹介するとともに、今後は、「学ぶ」「考える」そしてそれを「使う」ことを大切にしながら、皆様とのご協力のもと「共創」を目指して、事業を作っていきたいとの展望を語りました。

(独)国際交流基金 理事長 梅本和義氏

評議員 康本健守

(公財)国際文化フォーラム 常務理事 水口景子氏

続いて第16回かめのり賞表彰式です。康本をプレゼンターに、評議員・かめのり賞選考委員 宮嶋泰子の司会のもと、トロフィーと目録が3団体に贈られました。

かめのり大賞 草の根部門を受賞したのはMinamiこども教室です。同団体は大阪で、外国にルーツのある子どもたちの学習支援をしています。副実行委員長 古賀依枝氏と田中浩昭氏が登壇し、当初は10名だった利用者が、10年間の活動を経て現在は150人以上になっていると話しました。2020年には相談事業を開始。行政や支援団体と連携しながら在留資格や就学、金銭面の相談等に応じています。「困り感を持たずに生活できるよう、家族と家庭に寄り添うことを大切にしている」と言う古賀氏。「地域に暮らす人が国籍やルーツ、ジェンダーに関わりなく、背負う荷を分かち合い、子どもたちが伸び伸びと成長できることを願っている」と話しました。

かめのり大賞 人材育成部門は特定非営利活動法人日本ミャンマー豊友会に贈られ、理事長の近藤秀二氏が活動を紹介しました。同団体はミャンマー・シャン州の少数民族パオ族と活動し、現地の状況に応じた支援を継続してきました。少数民族の子どもたちが就学後、ビルマ語の壁のためにドロップアウトしやすいことから、職業教育の大切さを認識。職業訓練所を設立しました。地元NPOが美容やホテルのコースを、日本ミャンマー豊友会は日本語講座を提供しています。来年度は介護コースも新設する予定です。現地の社会情勢を踏まえ、今後は若者を日本に迎えて人材育成を行うことを予定しており、「10年後のミャンマーでリーダーシップを取れるような人材を育てたい」と決意を話しました。

常務理事 西川雅雄

評議員・かめのり賞選考委員 宮嶋泰子

かめのり賞授賞式の様子

理事・事務局長 西田浩子

先駆的な取り組みを評価するかめのりさきがけ賞を受賞したのは、特定非営利活動法人北関東医療相談会で、事務局長の長澤正隆氏が登壇されました。同団体は1997年に群馬県で「外国人の為の医療相談会」として発足。日本の在留資格を持たない方、特に仮放免の方の支援をしています。仮放免者は労働が認められず収入も社会保険もないため、医療を受けることが難しい状況にあります。そこで健康診断会の実施や治療費のサポートを行ってきました。また、仮放免の問題点を改善するよう省庁に求めるほか、国際機関に対する働きかけも実施。成果が実り、国連の自由権規約人権委員会は今年、日本の「Karihomensha(仮放免者)」の不安定さに対し懸念を示しています。

弊財団常務理事 西川雅雄による挨拶に続き、公益財団法人国際文化フォーラム常務理事 水口景子氏による乾杯のご発声で会食の時間へ。水口常務理事からは「志を同じくする方が集まり情報交換できるこの場に感謝したい」とありがたいお言葉をいただきました。こうして「かめのりフォーラム2022」は盛会のうちに幕を閉じました。

特別講演

狂人日記と公益資本主義

アライアンス・フォーラム財団 会長　DEFTA Partners グループ 会長
原　丈人 氏

『狂人日記』は中国の作家、魯迅による小説です。日本留学で自国を客観視したことが作品を生んだ点にちなみ、会場の留学生やこれから世界へ羽ばたく日本の若者にもそんな経験をしてほしいと今回のタイトルを付けました。

私のライフワークは鉄道と考古学です。27歳まで中米で考古学を研究した後、ビジネスで研究費を稼ぐために米国に渡りました。経営学と工学を学び、光ファイバー技術の会社を始めました。

その後ベンチャーキャピタルの経営などを行いましたが、2000年以降は活動の方向性を大きく変えています。きっかけは1997年に米国のビジネス・ラウンドテーブル(BRT)が、会社は株主のために存在すると掲げたことでした。私は、会社は社会の公器だと確信していました。株主第一主義は投機的な金融を生み、いずれは格差拡大につながります。そこで米共和党の仕事を皮切りに政府の仕事を受けるようになったのです。

日本の現状を見ていきましょう。日本人の平均給与は長らく伸びを見せず、今やOECD平均を下回っています。非正規雇用が増加し、若者は将来設計を描けません。デフレで給料が下がり家計が節約志向になると、企業は価格競争に陥って利益が減少し、ますます賃金を払えない。デフレスパイラルを止める出発点は給与を増やすことです。

そのために公益資本主義を使いたいと考えています。公益とは、私たちおよび子孫の経済的・精神的豊かさを言います。会社は「社中」すなわち、社員、顧客、仕入れ先、株主、地域社会や地球全体に支えられています。よって利益は株主のみで分配するのではなく、社中で分配すべきです。分配を繰り返すためには中長期の視野に立った経営が不可欠。そして繁栄を続けるためにはイノベーションが鍵となります。公益資本主義の考え方で成長と分配の舵取りをすれば、豊かなゆとりある国家が生まれるのは確実です。

ところが今の日本では株主還元を優先する企業が続出しています。これは2014年のコーポレートガバナンス・コード導入決定以降に現れた傾向で、短期的利益を追求するファンドのみが儲けを得る状況が実際に起きています。

これを引き起こしたのは小泉政権以降行われてきた、ファンドに有利な構造改革や成長戦略、規制緩和でした。株主還元が求められる民営化はコストカットとサービス低下をもたらし、国民の利益になりません。

私は、国民のためにならない法律を変えるために、首相や大臣に助言を続けてきました。公益資本主義を提唱したのは2003年でした。2007年に出版した『21世紀の国富論』は中国でも翻訳され広く読まれています。2019年にはついにBRTが株主第一主義を見直し、2020年にはダボス会議でもステークホルダー資本主義が掲げられました。少しずつですが変化は起きています。

令和版所得倍増のための3つの政策軸として私は1)公益資本主義経営による分配と中長期成長の実現、2)公的固定資本形成の財政出動によるマクロ成長、3)地域的な包括的経済連携(RCEP)のルールメーカーとなり世界でさらに成長することを提言しています。欧米の取り決めにただ従うのではなく、自分の考えを発信し世界を牽引する日本人やアジア人が増えてほしいと期待しています。

大学院留学アジア奨学生　夏の研修交流会 in 長崎

（公財）かめのり財団では毎年９月に、大学院奨学生の研究の進捗発表と相互交流の促進を目的とする研修交流会を行っています。今年は2019年の函館以来３年ぶりに、2022年９月13日（火）～15日（木）の３日間、長崎市内にて実施することができました。

この研修交流会ですが、コロナ禍により過去２年間はオンラインでの実施で、現役奨学生にとって、これが対面で初めての研修交流会です。奨学生が選んだ長崎は国際交流都市として長い歴史を持つだけでなく、弊財団木村晋介理事長のゆかりの地でもあります。事前に理事長から様々なアドバイスを受けながら、2泊3日の滞在は時間の許す限り、日本の文化と歴史を知ることができました。安土桃山時代から江戸時代の交易、明治維新、そして戦争の史実、食や芸妓の文化を現地で学んできました。

また、今回長崎県警察本部への訪問が叶い、同本部長中村亮氏から各国語での歓迎のお言葉とともにお出迎えを受け、通信指令室と交通管制センターを見学した後、中村本部長との奨学生との懇談の時間を持ちました。中村本部長からは自然災害時や国際都市ならではの警察の役割のお話やそれぞれの奨学生との質疑応答などがあり、奨学生は日本の警察の現況を知ることができ、大変有意義な訪問となりました。

（西田 浩子）

グラバー園にて

長崎県警察本部を表敬訪問

研修の様子

「長崎で広がる交流の輪」

文：金 叙娟（東北大学）

今回の長崎での研修交流会は、学問においても、また文化の面でも刺激的な経験でした。台風の懸念がありましたが、長崎空港に到着すると、幸いにも晴れた天気と青い海が私たちを迎えてくれました。その後もずっと天気に恵まれ、少し暑いときもありましたが、長崎を満喫することができました。最初の日には奨学生４人の研究発表、次の日には２人の発表と西田事務局長の特別講義がありました。それぞれのフィールドで精力的に研究していて、どれもが興味深いテーマで、私自身も刺激を受けました。また、西田事務局長からの特別講義も印象に残っています。人生を自分らしく、どのように送るか、という自分への問いを続ける私にとって、西田事務局長のライフ・ヒストリーが深く込められていた講義は、非常に励みになりました。

２日目から３日目にかけては、長崎市内の様々な文化遺産や、原爆の遺跡、県警本部などを訪問しました。原爆資料館に行ったときは、原爆の威力を感じさせる遺物や写真なども見ることができ、過去に起きた史実ではあるけれど、現代の私たちにとって戦争について考えさせる大事な場であると感じました。大浦天主堂、長崎歴史文化博物館や、出島からは、長崎と中国、韓国、オランダなどとの交流の歴史と文化について多くを学ぶことができました。さらに、色々な文化が交じり合った長崎の卓袱料理や、砂糖の文化を感じることができるカステラなど、食においてもその影響が深く残っていて、自分が勉強している東北地方の食文化とは異なるところもあり、興味深かったです。

コロナの影響で対面での研修会は自分にとって初めてだったので、最初は緊張半分、期待半分で研修交流会に参加しました。ただ、緊張の気持ちは、あっという間になくなりました。それぞれ住む地域や出身国、専門分野も異なっていて、個性豊かな奨学生のメンバーたちとは、研究・進路のことや、母国の文化や言語、趣味なども含め、話は非常に弾み、楽しく過ごすことができました。

修士２年ということで、これからより本格的な修士論文の執筆に入ることを考えると、かなり重圧も感じていますが、長崎という国際色豊な地で、皆さんと過ごした熱い研修交流会は、これからも大切な記憶の一つとしてとどめておきたいです。

大浦天主堂を背に

「夏の長崎、かめのりファミリーと一緒に作った思い出」

文：宜 鯤（京都大学）

９月13日から15日までの3日間に、長崎で夏の研修交流会が行われました。奨学生として３年目の私にとって、対面交流会は最初で最後でしたから、出発日までにずっと心待ちにしていました。

１日目の午後と２日目の午前は研究発表会です。研究発表会で皆さんの研究を聞いて、様々な分野の知識と研究の姿勢を教えていただきました。より広い視野で物事を考える能力を習得し、大変勉強になりました。

西田先生の特別講義では、人生の経験を紹介していただき、「人生は選択」「学び続ける」「失敗から何を学ぶ」「幸せかどうかは自分が決めること」など貴重な言葉をいただきました。私の理解では、人間は生活の中で様々な問題に遭遇し続けます。有限な可能性の中でどのような選択を取るのかが、その人の人生そのものです。自分の選択は正しいかどうかは自分が決めることです。学び続けることにより、より多くの解決策、可能性が見つかり、新しい選択肢になります。また、自分の選択により問題をうまく解決できれば良いですが、解決できなくてもその経験が次回の参考になります。

２日目の午後、私たちはグラバー園、大浦天主堂、眼鏡橋と出島を見学しました。日本とオランダとの貿易及び近代化の歴史を勉強しました。３日目の朝には、長崎県警察本部を表敬訪問しました。通報を受ける仕組みと交通渋滞緩和の仕組みを紹介していただくことにより、警察官がどのように社会の平和を守っているのかを見学しました。表敬訪問に続いて、平和公園と長崎原爆資料館を見学しました。原爆の悲劇を語る遺品から核兵器の恐ろしさを知り、平和の大切さを深く感じました。午後には長崎歴史文化博物館を見学しました。そこは江戸時代から近代にかけて日本と海外の交流に関する資料を扱う博物館です。オランダだけでなく、中国、朝鮮との交流の歴史も紹介されています。見学する時、皆さんと文化交流について色々な話ができ、有意義な時間を過ごしました。

眼鏡橋の前で

博士後期課程の３年目で、論文執筆、論文投稿、修了後の進路など色々な悩みを抱えている私は、皆さんから励まされ、そのことに心から感謝いたします。やはり対面交流会でしか感じられない雰囲気があり、奨学生として卒業する前にこのように実地での研修交流会を行い、かめのりファミリーと大切な思い出をつくることができ、大変うれしく思います。

「かめのりファミリーと一緒の夏」

文：ホウ ワイ イップ（立教大学）

９月13日の早朝、かめのりのメンバーと長崎への旅が始まりました。15日までの３日間、かめのり財団の大学院奨学生が長崎に集まって、夏の研修交流会を行いました。4月のオリエンテーション以降、奨学生たち全員が集まるのは今回が初めてのことです。前回の研修交流会は、コロナの流行による制約のためオンラインで行われたので、今年は運が良かったです。これでやっとみんなに会えると思っていたら、悪いニュースが告げられました。参加する予定だったメンバーのうち、何人かが体調不良などにより来られなくなりました。この研修交流会に全員が参加できなかったことは残念でしたが、残りのメンバーが無事に長崎に到着したのは本当によかったです。

初日の午後と２日目の午前中に、奨学生が各人の研究について発表しました。専攻は違いますが、お互いの研究内容を聞いたり、異分野を知ったりできることはとても有意義です。発表の間には、お互いの研究をより深く理解するために、たくさんの質問が交わされました。分野外の人からの質問は、私たちの研究にいつもと違う視点を与えてくれます。この研修交流会では、全員が収穫を得ることができたと思います。

発表が終わった後は長崎の観光地を巡り、その土地の歴史を学び、文化を体験する時間を楽しみました。他のメンバーと一緒に行動することで、お互いのことをよりよく知り、より強いつながりを築くことができました。夜景はキレイでしたし、長崎の伝統料理は美味しかったです。みんなで芸妓さんたちと一緒に踊ることは、間違いなくこの旅のハイライトでした。ツアーの最後にはみんな疲れてしまいましたが、長崎での時間を満喫し、この３日間の旅で仲良くなれたので、別れを惜しんでいるような気がしました。

今回の研修は短いものでしたが、先輩方がおっしゃっていた「かめのりファミリー」の一員であることを実感しています。仲間を作り、互いに学び、共に楽しんでいます。大学院生として最後の年ですが、この出会いが今年の夏をとても思い出深いものにしてくれました。

設立15周年記念事業

かめのりカレッジ 2022 サマー

2022年夏、グローバルでの活躍を目指す大学生を対象に「Kamenori College 2022 Summer」を実施し、神奈川県のレクトーレ葉山 湘南国際村で2022年8月30日（火）～9月2日（金）に開催したメインプログラムには、コロナ禍以降では初の海外から招へいした大学生も参加しました。

海外学生と積極的に意見交換

プレゼンテーションの様子

将来グローバルでの活躍を目指す大学生を対象に、グローバルコミュニケーションに必要なスキルとマインドセットの醸成を目的とし、2019年より青少年交流事業として「かめのりカレッジ」を実施しています。コロナ禍では、様々な制約の中で、プログラムの構成や内容を模索しつづけてきましたが、この度の「Kamenori College 2022 Summer」は、ハイブリッドの構成とし、オリエンテーション、事前英語プログラム及びチームディスカッションをオンラインで、そして最後にメインプログラムを合宿形式で無事に全てを終えることができました。

参加者は国内在住の日本人大学生と東南アジアから来日した大学生で、2022年7月24日のオンラインオリエンテーションにて初顔合わせを行いました。使用言語は英語のため緊張した様子の学生も見られましたが、本プログラムのテーマ「Be Active and Enjoy!」に導かれ、英語が流暢な海外の学生だけでなく、日本人学生も徐々に発言が増えていきました。プログラムディレクターの山本智巳氏によるテーマや趣旨の説明を受けて、メインプログラムの最終日に行うチームプロジェクトの発表に向け、早速チームに分かれると、学生たちはメインプログラムまでの1ヵ月間に行うディスカッションのスケジュールをチームごとに検討し、SNSを駆使してミーティングの設定や連絡先の交換を行いました。

8月30日から9月2日の3泊4日で行ったメインプログラムでは、講師陣には大学教員のほか、ビジネスの第一線で活躍する方などをお招きしました。感染症対策による制限は多少あったものの、講師と学生とのインタラクティブなセッションが提供され、また毎晩のチームプロジェクトでプレゼンテーションの準備を重ねることで、失敗を恐れずに英語で自身の意見を臆せず伝えられるまで成長した姿が印象的でした。チームワークショップの指導には、山本氏に加え、英語プログラムの講師を務めた今北一成氏にも加わってもらい、2人のアドバイスを受けて、どのチームも発表前夜ぎりぎりまで悩みながらも、チームメイトと最後まで力を合わせて発表準備を行いました。

最終日のプレゼンテーションでは、単に自分のパートの英語を暗記して発表するのではなく、聴衆にアピールし、そして次のチームメイトへスムーズにバトンを渡すことが大切です。プレゼンテーションの内容、スキル、チームワークをバランスよく評価されます。プログラム全体の期間として1ヵ月程度しかなかった中で、完成度の高い発表ができたことは彼らの自信につながったことでしょう。

合宿が無事終了し、日本人大学生14名と東南アジアの大学生3名（インドネシア、フィリピン、マレーシアから各1名）の計17名が、このプログラムの修了生となりました。参加後には「チームワークショップは難航することが多かったが、最終的に良いプレゼンに持っていくことができた」、「同じ志を持つ同世代と共に講義を受け、生活を送ることによって自分の力不足を痛感するとともに学びへの意欲が掻き立てられた」、「合宿時のチームワークショップは密度が濃かったから、オンラインの時には想像できないほど仲良くなることができた」などの感想があり、彼らの達成感とともに、事前オンラインプログラムを経てから対面のプログラムに臨めたことで大きな効果がうまれました。今後も青少年交流プログラムでは、コロナ禍で試行してきたことを糧に、再開していく対面事業をより充実したものとしていきたいと思います。

ベストチーム賞の4名

設立15周年記念事業

かめのり未来をつくるリーダーシッププロジェクト

(公財)かめのり財団では今年度、(特非)青少年育成支援フォーラムとともに、2022年9月から2ヵ月間にわたる、新しい青少年交流事業を企画しました。「全員発揮型のリーダーシップ」について理解を深め、必要なスキルを身につけることを目指した事業で、2022年10月9日(日)〜10日(祝)に合宿研修を実施しました。

2022年10月、東京都内のL stay & grow晴海において、かめのり未来をつくるリーダーシッププロジェクト2022(Kamenori Academy for Future Leaders、略称KAFL)の合宿研修を1泊2日で行いました。

KAFLの主な目的は「それぞれが持つリーダーシップを発揮できるようにすることで、身の回りや社会課題の解決にリーダーシップを発揮し、チャレンジし続ける人材の育成を目指す」ことであり、高校1年生から大学3年生を対象として募集し、合宿研修には19名の参加がありました。現代は、変化が激しく、不確実で、そして複雑、しかも曖昧な時代(VUCA時代※)とも呼ばれ、権限や責任を伴うリーダーシップだけではなく、それぞれの強みなどに基づいたシェアド・リーダーシップ、つまり全員発揮型のリーダーシップが重要だと言われています。KAFLはその全員発揮型のリーダーシップを参加者に身に付けてもらうためのプロジェクトです。

※Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字を並べたもの

合宿研修の前に、オンライン研修を4回行い、その合間にはオンデマンド学習を3回行いました(図参照)。オンライン研修でグループワークを繰り返していた参加者の中から、「早くリアルに会っていろんな話がしたい!」という強い要望が出され、9月の段階で合宿研修への期待が大きく膨らんでいました。

合宿研修ではオープニングの後、佐渡涼子講師によるエナジャイザー(仲間づくりのゲーム)を行い、そこでできた偶発的なグループでグループ分けを行いました。そして、そのグループで木製のブロックを使った高積みゲームでリーダーシップワークを行い、リーダーシップのウォーミングアップを行いました。各グループでは構造、方法、チームワークなどにリーダーシップを発揮して工夫した取り組み、制限時間内にどれだけ高く積み上げられるかに挑戦し、盛り上がりを見せていました。

その後、グループごとに取り組みたい社会課題のテーマを設定し、それぞれのリーダーシップを発揮しながら、社会課題の解決に向けたプランづくりを進めました。各グループが選んだ課題は、海洋プラスチック、児童労働、ネットリテラシー、観光業の活性化等、多岐に渡りましたが、テーマ設定の時点でもメンバーそれぞれが上手にリーダーシップを発揮し、スムーズに進行したところもあれば、テーマ設定に手間取り、なかなか進めないグループも出てきました。また、テーマ設定後の具体的なプラン作成においてはいずれのグループも壁にぶつかり、社会課題の解決がやさしくないことを実感したようでした。しかし、高校生と大学生がそれぞれのリーダーシップを発揮し、サポートし合い、グループの課題を克服することで、2日目の午後には全グループがゴールへと辿り着くことができました。

合宿研修後のアンケートでは「リーダーとは一人の役割ではなく、全員の役割であることがわかった」、「自らのリーダーシップの課題を見つけることができた」、「どのような場所でも本来自分が持っているリーダーシップを発揮することができるようになる」などの回答があったことから、リーダーシップに関する参加者の成長が伺えます。若者のリーダーシップを育てるために、来年度以降のKAFLにも大きな期待を寄せるところです。

報告:講師 横田 秀策(一般社団法人FCC GROOVE 代表理事)

発行人 / 西田 浩子　編 集 / 谷本 知子　執筆協力/近藤 圭子(エコネットワークス)　デザイン/イワブチサトシ(BUTI design)　印 刷/株式会社佐伯コミュニケーションズ

日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します!

公益財団法人 かめのり財団 The Kamenori Foundation

〒102−0083 東京都千代田区麹町5−5 ベルヴュー麹町1階

TEL:03-3234-1694 FAX:03-3234-1603

E-mail:info@kamenori.jp URL:https://www.kamenori.jp/